

苦難の時代を耐えて

ロータリアン誌
4月号より要約

大恐慌と大戦の頃のロータリー

Lean times but Rotary thrived by Leland D. Case

2月号にスチュワート前RI事務総長執筆の“ロータリー最初の25年間”がロータリアン誌より転載された。今回はその続編として、それ以後25年間のロータリーの歩みを元ロータリアン誌編集長が綴る。75周年記念シリーズの一環。

元ロータリアン誌編集長 レランド D. ケース

「素晴しき親睦」—1955年6月の国際ロータリー大会を特集したロータリアン誌は、こう見出しをつけた。ロータリー50周年に当たったこの年は、64ヵ国から1万5000人近くのロータリアンがシカゴに集まり、親睦の楽しみを満喫したのである。

世界の大部分の国は平和を享受しており、多くの人たちにとって、個人的繁栄と経済的繁栄の時代であった。ロータリアンも例外ではなかった。当時のRI会長A. Z. ベーカーは、ロータリーの前途に広がる青空を見透してこう言った—「日がまた昇っている。新しい一日の始まりだ。大地を耕し、種をまき、育て、刈り取るための、われわれの新しい一日だ。どういう収穫が得られるのだろうか？」

まさに、素晴しき親睦であった。

だがそれから25年という短い歳月は余りにも大きな変化をもたらした。

苦難を越えての発展

1930年、ロータリーは、25年という単位でいうと、二つ目のそれに足をふみ入れ、シカゴで開かれた25周年記念大会への参加者は、1万1008名という記録的数にのぼった。しかし、そのにぎわいには、不安が入り混じっていた。1929年の株の大暴落は、1919年に、ハーバート・フーバーが予言した“避けることのできない経済的な崩壊”へとつながっていったからである。

運命の皮肉ないたずらによって、大恐慌がやってきた時のアメリカ大統領は、ほかならぬハーバート・フーバー自身であった。

この大不況はロータリークラブにも深刻な影響を及ぼした。会員数の増加は停滞し、シニア・アクティブの制度をとり入れて、かろうじて減少を防いだ。例会場ですでに食事を済ませてきた会員、あるいは養生食しかとらないと称する会員のために別のテーブルを設けるクラブもでた。謝礼を払ってスピーカーを招くことを止め、代わりに会員が自分の職業について順番に卓話を行なう工夫がなされたのもこの頃である。

この大恐慌と並んで、ロータリーに精神的重圧を与えたのは、“商業的文化”を批判するジャーナリストたちであった。舌鋒の激しさで知られた『アメリカン・マーキュリー』の編集長H. L. メンケンが、その社会批判の多くで、ロータリーを槍玉にあげていた。例えば、「ロータリアンとは、バプテスマのジョン（キリストの先駆者でキリストに洗礼を施した人物）をジャックと気安く呼んだ最初の人間である」といった調子だった。

著名な作家シンクレア・ルイスも、同じような印象をロータリーに対して持っていた。2作目の『メイン・ストーリー』ではあまり厳しい調子ではなかったが、3作目の『バビット』では、極めてあからさまだった。この作品の表題であるバビットという言葉が新しい意味をも

The ROTARIAN



1932年6月号 ロータリアン表紙

つようになった。『ウェブスター中辞典』がこの語に「中産階級の支配的な価値観に無分別に迎合する実業家または専門職業人」という定義を与えたからである。ロータリアン誌編集部が騒ぎだしたのは、この辞典のライバルが、「バビット＝ロータリアン」という定義をのせるといふ噂が聞こえてきたときであった。

反論すべき時期が来ていた。しかし、状況を考えると、巧妙な策で対抗しなければならなかった。ロータリーの内部で、二つの指摘がなされた。一つは、作家というものは、実の子供よりも、自分の頭脳が生み出したもののほらに誇りを抱くということであり、もう一つは、書き手は、その原稿を掲載する雑誌に特別の親近感をもつということだった。ロータリアン誌は、最も齒に衣を着せないロータリーの批判者たちに、それぞれが好む主題（ただし、ロータリー以外のこと）で書いてもらうことに決めた。選ばれたのは、シンクレア・ルイス、H. L. メンケン、ジョージ・バーナード・ショー、それ

にクラレンス・ダロー（死刑廃止を支持したアメリカの刑法学者）だった。

というわけで、1934年8月のある日、バーモント州サウス・ポンフレットのシンクレア・ルイスの山荘に、不意に、来客が現われた—しかも午前8時にだった。

「いったい誰だね。それに何の用だね？」と青いバジャマ姿のルイスが怒鳴った。来客は、丁重な口調だったが、やはり大声で、ロータリーの雑誌の編集者で、ロータリーのどこが気に入らないのかを伺いにきたのだ、と返答した。

「とにかく座りたまえ。話はあとだ」と、ルイスは来客を中へ入れた。朝食がすむと、編集者は、もう一度、来訪の目的を話した。

「他人を姓じゃなくて、名で呼ぶのが気に入らん。先だって、この近くのロータリークラブに行ったら、連中は、初めから、ぼくをシンクレアって呼ぶんだ。おふくろが死んで以来、そう呼ばれたのは初めてだったよ」

ミネソタ州ソークセンター出身の名士だったシンクレア・ルイスが、うまい話の糸口をつくってくれたので、編集者は、さっそく、それにとびついて、シカゴの孤独な人たちが、ルイスも含めて、故郷での少年時代にそうであったように、名やあだ名で呼び合うことによって、短期間に友だちになることができたという、ロータリー内部では有名な話を披露した。

4時間後、ルイスの山荘を辞してシカゴに戻ってきた編集者に、ルイスから、手書きの手紙が届いた。それには、話を聞いて「ロータリーを快く思うようになった」と書いてあった。間もなく、ルイスはロータリアン誌の寄稿家の一人となり、ショーもメンケンもダローも、同じく、原稿を寄せるようになった。そして、それ以後、4人の誰もが、ロータリーの悪口を言わなくなった。ニューヨークの辞書の編集者が、「バビット＝ロータリアン」という定義の原稿を書いていたにしても、それはくずかご行きになったにちがいがなかった。

新しい本部の誕生

この年月の間にも、ロータリーは成長を続け、世界に広がっていった。成長につれて、ロータ

リーの組織は近代化され、合理化されていった。各クラブの会合のほかに、地区ガバナーが国際協議会——年1回開かれる、地区運営についての集中セミナー——に参加するようになった。

参加者数がふえたために、年次大会の運営はまるで議会の運営のように、むずかしいものになってきた。そこで、1933年に、今日のRI規定審議会の前身である、諮問機関が発足した。この諮問機関にたくさんの決議案が持ちこまれたが、これらは機関内で討議されたあと、コメントを付して、年次大会での投票にまわされていった。

会員の数がふえるにしたがって、シカゴの本部の仕事も、それだけふえていった。1940年代に、シカゴの建物の賃貸料が高くなったことで新しい本部ビル建設が計画され、いくつかの都市が立候補した。最も熱心だったのは、ダイナミックで誇りたかい高地の都市、コロラド州デンバーだった。デンバーが熱心に運動したにもかかわらず、メキシコシティでの1953年大会で選ばれたのは、イリノイ州エバンストンだった。

1年後、エバンストンに3階建てのビルが完成し、その円形の大広間には、各国の国旗が飾られた。130名の職員を率いていたのは、元海軍の測量将校ジョージ R. ミーンズであった。ミーンズは、わずか3代目（チェスリー・ペリーが初代で、2代目がフィリップ・ラブジョイ）

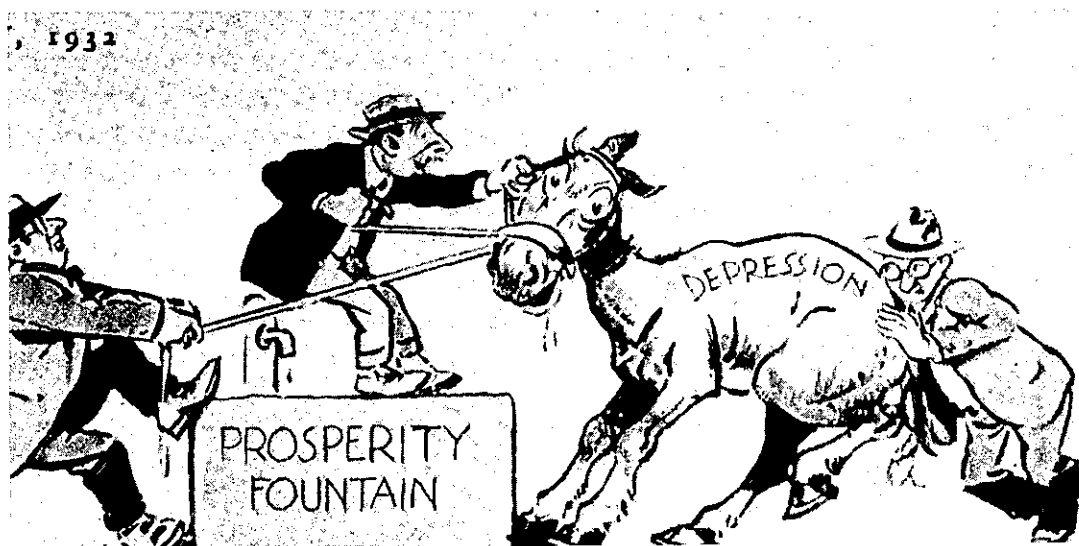
の事務総長だった。

会員同士のうわさ話やクラブでの話題は、新しい本部のことだけではなかった。国際ロータリー会長の選出方法が広く論議を呼んでいた。従来のやり方は、自分たちの仲間から会長を出したいと考えるクラブや地区が候補者を“発表”し、そのあと、決められた方法で選挙運動が行なわれる、というものであった。しかし、会長選挙をめぐる、“政治的派閥”とか“実力者”とかということが、ゴシップとなっていた。

RI 会長選挙に新方式採用

会長の選挙方法は、こうしたゴシップにもかかわらず、改正が加えられないままにきたが、1938年、シカゴ・ロータリークラブの週報ジャーネーターが「役職が人を求めるべきではないのか？」という記事を掲載し、同じ年にサンフランシスコで開かれた年次大会で、1913—14年度に会長をつとめたラッセル F. グレイナーが、これに賛同し、「一般のロータリアンの間では、役職が人を求めるべきだという考え方に賛成する気運が高くなっている」と主張した。

しかしながら、シカゴの弁護士であり実業家であったジョージ C. ヘイガーが、すでに、RI 会長に立候補を“発表”していた。そこで、シカゴのロータリアンたちは、会長選出方法改革を討議する会合を開き、この会合に参加した著



繁栄という名の泉に不況という馬を近づけたが泉の水を飲もうとしない。(1932年世界大恐慌の頃にロータリアン誌に掲載されたイラスト)

名な公法学者アレン D. アルバート博士 (1915—16年度 RI 会長)の説得力ある主張もあって、ヘイガーは、改革に同調したのである。

アルバート元 RI 会長は、RI の指名委員会が、被選挙資格のある元 RI 理事の中から一人の候補者を推薦する方式に賛成していた。予想されていたような耳障りな騒ぎは起こらず、オハイオ州クリーブランドで、1939年に、新しい選挙方式が定められたとき、会長の職にあったのは、ジョージ・ヘイガーだった。

ロータリーの歴史の中期に当たるこの時期の約半分 (1942年まで) にわたって、その国際的な本部のかじを取りつづけたのが、初代事務総長であり、ロータリーのごく初期から、シカゴ・ロータリークラブのメンバーだったチェスリー R. ベリーであった。ロータリーの創始者ポール・ハリスは、かつて「多くのロータリアンにとって、チェス・ベリーと国際ロータリーは同義語である」と書いたことがある。

シカゴでの少年時代に、米西戦争に士官として参加した際に学びとった自律心、そして司書として身につけた仕事の手際よさを加えて一体にすると、チェス・ベリーの人となりになる。1942年に引退するまで、物事を達成することが生きがいであったチェス・ベリーの“辞書”には「超過勤務」ということばはなかった。今日のことばでいえば、“働き中毒”ということになるのかもしれないが、それでは、楽しみを見つけだす、生まれながらの彼の才能を見落としていることになる。

ロータリーと国際化

さまざまな“行動の方式”が、ロータリーという国際的な親睦の場でひとつにまとめられていった。その結果、ときどき、おもしろいことが起こる。アメリカのロータリークラブの例会での昼食で歌をうたうのにびっくりしたバリのロータリアンが、「男が昼間に歌をうたうのを聞いたのは、これがはじめてですよ……アベリティブを飲みすぎた連中を除いてはね!」と言ったことがあった。

また、シンガポールでの例会に出たカリフォルニアのロータリアンは、帰ってきて、仲間に



ANDRE MAUROIS... A Time for Great Faith EDWARD RAYMER... Thank You, America!
HARRY BOTSFORD... What 'Vets' Want DEBATE-OF-MONTH... Closed Shop?

Rotarian

1945年6月号 ロータリアン表紙

こんな話をした——「びっくりしたよ。10近くの違った国籍の人が同じテーブルを囲んでるんだぜ、宗教的な戒律のせいで、牛肉を食べない人もいれば、豚肉を食べない人もいるというわけさ。ある上流のロータリアンなんかは、異教徒の手で汚されないように、自分専用のコックを連れてきてるんだ。それでも、当人は、ロータリーでの親睦を、本当に、楽しんでるんだ!」

宗教といえば、フランコ政権初期の頃、マドリドのロータリークラブで、宗教をめぐるもっと重大な誤解が生じたことがあった。ロータリーとカトリック教とのまさつが、不意に、表面化したきっかけは、1950年12月20日に発表され、のちにピオ12世によって承認された、バチカン法王庁の布告であった。その布告には「聖職にあるものは、ロータリーに属することも、ロータリーの会合に出席することも禁じる。信徒に、教会法の第684法に定められたことを遵守するよう強く要請する」とあった。

理事会の熱心に賛同を受けて、当時の RI 会長アーサー・ラグーは、報道機関向けに次のような発表を行なった——「ロータリーは秘密結

社ではない。入会資格は人種、宗教、あるいは政治信条とは無関係である。国際大会での議決によって、ロータリアンひとりひとは、自らの宗教と国家に忠誠であるべきことを期待されている」。ロータリーの反応の率直さと冷静さが、この紛糾を収束するのに役立ち、ヨハネス・パウロ2世法王が、ローマでの1979年国際大会をにこやかに歓迎したことで、この問題は、永久に、過去のこととなったようである。

第2次世界大戦が始まろうとするところになると、ロータリーの国際的な発展は、実際面での重大な問題に直面した。第2次大戦で敵味方に分かれることになった国のいずれにもロータリアンのいることに留意して、キューバのハバナで開かれた年次大会は、次のような決議を行なった——「自由、正義、真実、誓いの言葉の不可侵性、それに人権尊重のないところでは、ロータリーは存在し得ないし、その理想を広げていくこともできない」。この慎重に選ばれたことだが、あとに続く困難な歳月を乗り越えていくための、よりどころとなった。

組織も、人間と同様に、逆境にあったときにどう反応するかによって、その本質が判断されるとするならば、第2次世界大戦中のロータリーは、賢明に、そしてたくみに運営されたと言ってよいであろう。ロータリアンが創始し、発起し、支援した人道主義的な事業をあげるだけで、長いリストができあがる。

ロータリーと国連との関連も深い。これまでに、約50人のロータリアンが、いろいろな国の国連代表団メンバー、あるいはコンサルタントを務めている。R. I. B. I. の第13地区が主催し、諸外国の文部大臣と第2次大戦中にイギリスに逃れてきていた人たちを集めて開いた“非公式会議”がきっかけとなって、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）が生まれたことは、多くの歴史家の認めるところである。また、1945年にRI会長だったT. A. ウォーレンは、国連が誕生した10月の1週間を、“国連週間”とすると発表した。

公式には、国際ロータリーも、その理事会も国連憲章を「是認もしていなければ、是認を与えることを差し控えている」わけでもない。し

かし、国連に対しては応援を惜しまず、ロータリアンは「世界平和の確立をめざした国連の諸活動についての知識を得る」よう助力を行なっている。

ロータリー財団の萌芽

第2次大戦が終わったあと、地域社会の人々の要求に応えるため、1945—46年度RI会長チャールズ L. ホーラーのリーダーシップのもと、ロータリークラブは、さまざまな活動を行なった。

こうした活動もさることながら、ロータリアンの関心は、1917年以來ずっと、第2義的と考えられていたある提案に集中していった。1917年当時のRI会長アーチ C. クランプは、のちにロータリー財団と名づけられることになる、ひとつの基金 (endowment) の設立を提案していたのであった。1938年の年次大会で200万ドルの募金活動を行なうことが決められたが、世界大戦のため、実行不可能となってしまっていた。

皮肉なことに、創始者ポール・ハリスが1947年に亡くなったことが、ロータリー財団発展のきっかけとなった。亡くなった創始者を記念するため、何らかのことをしたいと望んでいた各ロータリークラブは、優秀な大学生に海外留学の機会を与えるための基金に、寄附を行なうよう要請された。1954年までに350万ドルの寄附金が集まり、1955年末で、奨学金を支給された男女学生は、57カ国の494名にのぼった。

ロータリークラブは、ポール・ハリスのために、ガラスと大理石の聖堂を建てるという道は選ばなかった。もっと大きなもの、もっと人間的なものをつくった。奨学金制度がそれである。今日、年間1500万ドルにのぼる寄附金は、多様な教育プログラムや奨学金を生み出している。ロータリー財団—これは波乱に富んだこの25年間の最も貴重な資産といえる—は、ロータリー創始者の夢であった国際親睦と調和の達成に向かって活動し続けるであろう。

筆者紹介 ケース氏は元ロータリアン誌編集長、米国西部歴史の研究会、Westerners International の共同創始者で終身名誉会員、現在79歳、アリゾナ州ツーソン在住。